

[書評]

Risa Goto, *Rhetorical Questions: A Relevance-Theoretic Approach to Interrogative Utterances in English and Japanese*  
(Hituzi Language Studies No. 3)

Tokyo: Hituzi Shobo, 2018. viii + 194p. ISBN 978-4-89476-883-3

内海 彰  
電気通信大学

## 1. はじめに

修辞疑問文 (rhetorical question) は、回答を期待するような通常の (情報要請) 疑問文とは異なり、回答を期待せずに主張や断定などを行う発話であるとされる。修辞学の分野では、どちらかという弁論技法としての側面に注目して「設問法」(佐藤・佐々木・松尾 2006) と訳すことが少なくなく、また反語法の一つとして分類される場合も多い(野内 1998)。このようなこともあり、メタファーやアイロニーに比べて、修辞疑問文そのものを対象とした語用論研究はかなり少なく、それらの研究も単発的である。

このような背景において、修辞疑問文を研究対象の中心に据えたのが本書である。著者の後藤は、Sperber & Wilson の関連性理論を基盤として、先行研究の問題点を指摘しながら幅広い種類の修辞疑問文を包括的に説明できる枠組みを提示している。修辞疑問文に対して質・量ともにこれだけの論考を行った例はおそらく過去になく、今後の修辞疑問文の研究は本書で提示している理論を避けて通ることができないであろう。修辞疑問文に関心を持つ読者にとっては must-read であるし、関連性理論やアイロニー、さらに語用論に興味を持つ読者にもぜひ手に取ってもらいたい書籍である。

本書は以下の8章から構成される。

1. Are Interrogative Utterances Asking Anything?
2. What Rhetorical Questions Are: The Pragmatic Properties of Interrogative Utterances
3. The Continuum of Rhetoricity
4. Triply Interpretive Use: Relevance Theory and Interrogative Utterances
5. Rhetorical Questions and Irony: The Echoic Hypothesis
6. Rhetorical Questions in Japanese

7. SFEs in Japanese Interrogatives 1: The Case of To Iu No Ka
8. SFEs in Japanese Interrogatives 2: The Case of Mono Ka

これらの章は二つのパートに大きく分けることができる。前半の1章から5章では修辞疑問文の普遍的な解釈メカニズムについて論じているのに対して、後半の6章から8章は日本語を対象として修辞疑問文によく用いられる文末表現に関する論考である。本書で用いられている例文がすべて英語と日本語であるため、著者は慎重を期して英語と日本語に限定するようなタイトルをつけているが、前半の論考は英語や日本語のみならず、他の言語でも同様に成立するであろう修辞疑問文の普遍的な枠組みを提示していることを指摘しておく。以下では、この二つのパートについて、それぞれ著者の主張を中心に紹介していく。

## 2. 修辞疑問文の理解メカニズム

修辞疑問文の理論を構築する上で、以下の2つの性質を説明することが不可欠である。

- (1) 疑問文は情報要請疑問文と修辞疑問文のどちらかに明確に分類できるものではなく、どちらも解釈できる曖昧なケースも含めて、連続的である。
- (2) 修辞疑問文の多くはアイロニーを伴うことから、修辞疑問文の修辞性をアイロニー・皮肉との関係で捉える必要がある。

関連性理論では、疑問文は、その答え（不完全な部分を補った疑問文の命題形式）が真ならば望ましい（つまり関連性がある）と話し手がみなす解釈的表示であると考えられる。通常の情報要請疑問文と修辞疑問文の違いは、答えが誰にとって望ましいかで説明される。情報要請疑問文の答えは話し手にとって望ましいが、修辞疑問文では聞き手にとって望ましいことになる。例えば、以下の修辞疑問文の対話例を考えてみよう。

- (3) A school teacher finds that Billy, a student in the class, is crying, and utters to the other students:
  - a. Teacher: Who hit Billy? (誰が Billy を殴ったのか?)
  - b. Student: Who knows? (誰が知るのか?)

発話(3b)は、一般的に“Nobody knows”を伝達するとされる極性反転型の修辞疑問文である。上記の考え方に従えば、(3b)の答えである“Nobody knows”が聞き手にとって関連性がある、したがって望ましいとなる。また、情報要請疑問文か修辞疑問文かが曖昧であるような疑問文は、その答えが話し手と聞き手のどちらにとって望ましいかが決定しにくいということになる。しかし、関連性理論によるこのような説明だけでは、修辞疑問文を

十分に説明し切れているとは言えない。例えば、(3b)の代わりに“Nobody knows”を発話した場合を考えてみるとよい。そこでポイントとなるのが前述した修辞疑問文の性質(2)、つまりアイロニー性である。

関連性理論では、アイロニーは誰かの思考・信念（や特定の人物に帰属しない一般的な信念）へのエコー的解釈（echoic interpretation）であると考えられる。エコー的解釈とは、エコーされた思考への話し手の乖離的態度（dissociative attitude）を含み、その思考に解釈的に類似した表示である。例えば、発話(3b)が先生の発話(3a)を解釈的にエコーすることによって、「誰がBillyを殴ったかを誰かが知っている」という先生の考えに対して皮肉的な態度を話し手（=生徒）が持つという高次表意を導くことができる。ここで著者は、関連性理論が想定する疑問文の答えではなく、この高次表意こそが修辞疑問文が伝達する聞き手にとって望ましい思考であると主張する。つまり、(3b)の修辞性を認識するには、エコー的解釈に基づく高次表意の導出が必要となる。

上記の説明は、以下に示すような一見するとアイロニーを伴わないと思われる修辞疑問文にも同様に適用可能である。

(4) A: What company's computer will you buy?

(どの企業のコンピュータを買うの?)

B: Well, what company do I work for?

(えーと、私が働いているのはどの企業なの?)

修辞疑問文(4B)がエコーするのは、発話(4A)ではなく、(4B)が情報要請疑問文である場合に導かれる「話し手が働いている企業を話し手が尋ねている」という高次表意であり、そこから導出される「話し手が働いている企業を話し手が尋ねることに対して話し手が皮肉的な態度を持つ」という高次表意が、聞き手にとって望ましい思考となる。このような導出は、(4B)が自分が明らかに知っていることを尋ねるという意味のない質問であることから容易に導くことができる。

以上のように、修辞疑問文は、アイロニーを生じさせるエコー解釈的表示と聞き手にとって望ましい情報の解釈的表示という二種類の解釈的表示なのである。さらに、アイロニーのためのエコー解釈的表示を認識することによって得られる高次表意が聞き手にとって望ましい思考であるという関係が成立する。修辞疑問文の理解にはこのような二重の解釈的表示が段階的に関与するという多層的な理解モデルが、本書で最も中心となる著者の主張である。

### 3. 日本語の修辞疑問文における文末表現の役割

日本語の修辞疑問文では、「俺の酒が飲めないっていいのか?」や「子供が親の命令に従

うものか?」のように、特定の文末表現がよく用いられる。本書では、「～というのか/っというのか」と「～ものか」の二つの文末表現を取り上げて、関連性理論に基づく論考を行っている。なお、いずれの文末表現においても、終助詞の「か」は命題内容が望ましい思考への解釈的表示を表す標識であると考えている。

まず著者は、文末表現「という」はエコー的再構成標識 (echoic reformulation marker) であると主張する。関連性理論では、“in other words” のような再構成標識は「再構成標識を含む文が表す命題 P はある思考 Q の忠実な表示 (faithful representation) であると話し手が信じている」という高次表意を導く働きがあると考えられる。著者のエコー的再構成標識という概念は、この高次表意における Q を以前の発話・文によって含意される思考 (つまりエコー的思考) に制限する。例えば、上司から酒を注がれた部下の「もう飲めないので勘弁してください」という発話に対して「俺の酒が飲めないっというのか?」が発話された場合、聞き手は部下の発話を忠実に表示しているという高次表意を導出しやすくなる。このことが、聞き手のエコー的解釈、つまり皮肉的態度の認識を促進することになる。なお、同様の意味で用いられる「～って」という文末表現も同様のエコー的再構成標識であるが、思考 Q が以前の発話から強く含意されるときにのみ利用可能である点が異なる。

一方、文末表現「もの」は、命題内容 P がその主題に対して話し手が持つさまざまな信念の集合に属するという高次命題を表現すると分析している。よって、「子供が親の命令に従うものか?」は話し手が自分の信念に関して尋ねるという行為になり、発話 (4B) と同様に、尋ねるという高次表意に対する乖離的態度が明確になる。

#### 4. おわりに

以上が本書における著者の主張の概要である。前半の修辞疑問文の多層的な理解モデルの話と後半の日本語文末表現の分析がやや乖離していたり、4~5章などの文章構成がややわかりにくいなどの気になる点も見受けられるが、全体的に読みやすく、著者の主張も明確に述べられている。ページ数も200弱であるので、量的にも手に取りやすいと思う。ただし、関連性理論やアイロニーの研究にあまり馴染みのない読者にとっては、少し理解しにくい箇所があるかもしれない。その際のささやかな道標として、本稿が役に立てば幸いである。

本書で述べられている研究で特筆すべき点は、今まで事実の指摘のみにとどまっていた修辞疑問文とアイロニーの共起のメカニズムを説明するとともに、修辞的用法かどうかの判断に皮肉態度の認識が不可欠であるという理解モデルを提案している点である。この多層的な理解モデルは、語用論や関連性理論の発展に貢献することはもとより、修辞疑問文の理解時間などを予測できるため、本研究を契機として認知科学や心理学などで修辞疑問

文を対象とした実験的研究も行われるようになるであろう。このような学際的な発展も期待できるのも本書の利点である。最後に一言。この書評を読んで、本書を手にとらない読者がいるのだろうか？

#### 参考文献

- 野内良三. 1998. 『レトリック辞典』東京：国書刊行会.  
佐藤信夫・佐々木健一・松尾大. 2006. 『レトリック事典』東京：大修館書店.